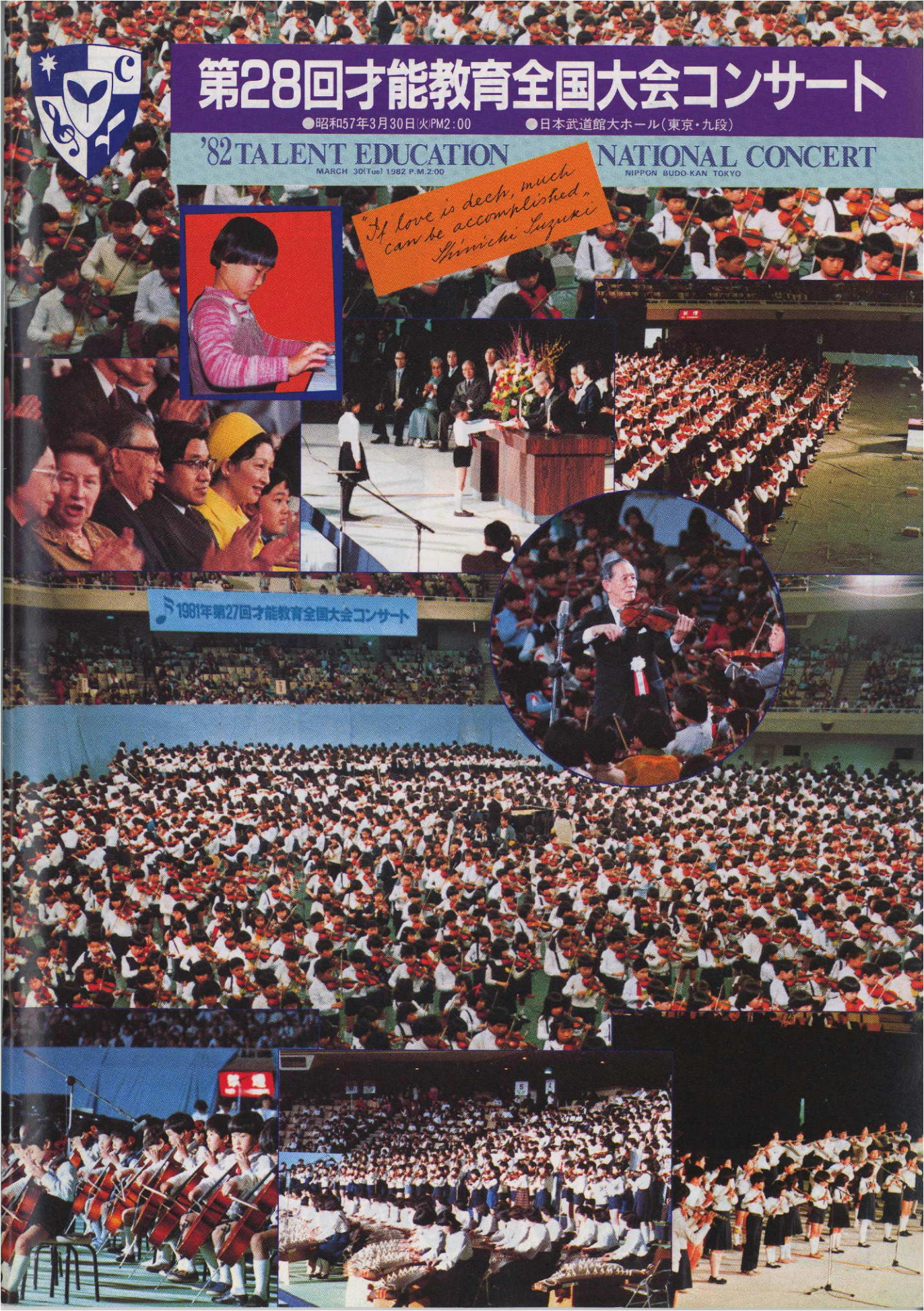
第28回才能教育全国大会コンサート

●昭和57年3月30日(火)PM2:00　●日本武道館大ホール(東京・九段)

'82 TALENT EDUCATION NATIONAL CONCERT

MARCH 30(Tue) 1982 P.M.2:00　NIPPON BUDO-KAN TOKYO



バイオリン　蛙も耳を　押えけり

会長　**鈴木鎮一**

美しい音を、美しい音をとめざしての私共の全国の指導です。生徒が押えつけてギーという音でも出せば「蛙さんが耳を押えますよ」と言ったりして生徒達は大喜びで、皆楽しくよくおけいこをしています。本日の三才以上の三千名からの斉奏が、このように美しい音で、リハーサルなしでぴたりと立派に音楽的に演奏出来るそのすばらしい事実、すなわちどの子も育つ教育法による子供達の高い能力の可能性をおきゝいただきとうございます。

世界中の子供達がみな、母国語だけが立派に能力を育てられているその事実を知る以上、母国語以外の総ての教育では育て方を間違えており、落伍者を山ほどつくっておき乍ら、子供の生れつきのせいだとしていることは、ほんとうに悲しい人類の重大な問題です。能力が生れつきではないとはっきりわかった以上、地上楽土の美しい人類の時代をつくることこそわれわれ総ての責任でもありましょう。

天の声　どの子も育つ道ありと

"A Violin makes the Frogg's Ear Shut"

Chairman of The Talent Education Institute
Shinichi Suzuki

Our nationwide guidance aims producing excellent and beautiful sounds by violin. When the children make creaky sounds by pressing a gut to their violin. I say "A frog will shut his ears" to them. They are much pleased to hear it and take lessons with pleasures.

Please enjoy the beautiful sounds of today's performance by three thousands of children selected from more than 16,000 children ranging in age from 3 to 8 and hope understand the splendid fact that evey child could play the violin excellently without rehearsal and the possibility of developing their abilities highly by our Suzuki method to develope the abilities of every child. The children all over the world are educated to be well at only their native languages.

All the educations other than native languages are incorrect making a lot of dropouts. It is an important and sad problem for human beings that it was said to be their nature. I believe that it is our responsibility to make a beautiful age of music on earth since the abilities of the children are not their nature.

"The Voice of Heaven shows the way to grown-up every child."

眼前に教育の奇跡を

名誉会長　**井深　大**

才能教育関係者にとっては当り前の事になっているこの演奏会も始めて聞く人にとっては奇跡としかうつらない感激と迫力を持っているに違いない。

2才、3才の子供達にこんな能力があるという事は音楽の分る人程信じられないことでしょう。

天才とか英才とかは生れつきのものではなく、早くから正しいスタートを切りさえすればどんな子供にでもこの奇跡は実現するのです。この奇跡はわが鈴木先生によって実証された日本での最大の創造であるといってよいでしょう。

今迄これだけ世界の多くの人達に大きな影響力を与えた事柄が日本にあったでしょうか。

大きくいえば子供の能力を伸ばし、よい人間造り、住みよい世界をつくり出すもとはこの鈴木メソードの才能教育からはじまるといっても過言ではないでしょう。鈴木メソードは決して音楽だけのものではなく、小さい時から本気になって出来る事を与えればちゃんとした人間が造り上げられる事をこれまでの歴史によって立派に証明しています。

来来年は日本で始めての国際大会が持たれる予定です。私達はこの運動を世界に広めて行く大きな責任があります。

世界中の人々が反目せずに、もっともっと仲良く手をつなぎ合って行く事が出来たらこんな幸せな事はないでしょう。その為の大きな役割を果せるのは言葉でなく、音楽による語り合いではないかと思っています。

第28回全国大会開催に際して

大会委員長　**本多　正明**

今年は全国大会を開催して28回目になります。当然のことですが第1回大会に生まれた子供は満28才になる訳です。この間会の発展は実に目覚ましいものがあります。それは残念ながら国内より海外で大きく飛躍しているのが実状と云えるかも知れません。日本での一般の理解がもう一つ充分でないからなのでしょう。

子供の才能は生まれつきのものでなく、環境で育つということを、この大会程如実にしめすものはありません。日本の各地で異った先生により、指導された子供達が、何のリハーサルもなく見事な演奏をする姿は外国の方々は現代の奇跡と讃えて居ります。それは表面の演奏の姿よりはるか、次元の深い教育の真髄を見、かつ理解されているからだと存じます。

昨年7月、東京の西武デパートで、国際脳障害児の絵画及び造形展を開催致しました。世界各国の施設から約300点の出品がありましたが、その見事な出来ばえに、来場された方々の多くは信じられない面持ちでした。

又同時に米国のマサチュセッツ大学で、才能教育国際大会が開催されました時、私は脳障害児の治療について講演をし、そのなかで、高橋宏幸君にモーツアルトの五番協奏曲を弾いて貰いました。彼は幼い時から多くの障害を持っている子供ですが、これを克服して立派に才能をのばしたこと、又そこまで育てられたお母様の努力に対し万雷の拍手がおくられました。

これ等の事実は、放置されておれば、才能の開発はおろか、言葉も運動もできない脳障害児もよき訓練及び指導により立派に育つということを実証しているのであります。

For The Happiness Of All Children.

The Role of Suzuki International Association. (ISA)

The first International conference of Suzuki Talent Education was held in 1975 at Honolulu, following at San Francisco, Munich, and Massachusettes. At the last conference at University of assachusettes, delegates representing many countries in Europe, America, Australia requested unanimously to have the next conference in Japan in 1983. Talent Education was first introduced in United States in 1964 when we took ten children to introduce the idea and method. Since it have been spreading all over the world. The basic philosophy of Talent Education is to acknowledge the potential of all children and develop it to high standard through music. If all children understand each other through this method, I am convinced that we will have much better world in the future.

母国語の教育法で育つ子供達

大会企画委員長
広瀬　八朗

皆様きょうは才能教育の全国大会によくいらっしゃいました。3000人の子供達による演奏会がこゝ数年続いておりますが実はこの会場も手狭になり新入生を曲目で制限して1500人以上も見学生と称して演奏を待ってもらっているのは残念な事です。

鈴木先生が母国語の教育法を発見され、また「能力の法則」を作られてから子供達はその法則に従い能力が育つ事がはっきりしました。どの子も育つ教育法がこの全国大会のコンサートで実証されて以来世界の多くの国々で鈴木メソードが始まり今もどんどん広がりつつあります。

この一月、私はオーストラリアの才能教育夏期学校に招かれて行って参りましたが、本当に立派に大勢の子供達が育っておりびっくり致しました。四年前に始めて招かれておとずれた時のレベルと隔世の感があり、子供達はすばらしく育って参ります。昨年９月にシドニーで行われたオーストラリアの全国大会のビデオを見ましたが、上級生の演奏にはじまりラストシーンでは約600人の子供達のゴゼックのガボットの立派な演奏に感動致しました。20万人以上鈴木メソードで勉強しているアメリカ、それにカナダ等はもっと歴史が古いのですが、ヨーロッパ各国でも今日の武道館の様な演奏会が行われる日がくるでしょう。

そして各国の人達が「どの子も育つ母国語の教育法を」と訴え音楽のみでなく、一般教育で世界中の子供達が鈴木メソードで育てられる日がくると信じます。

第28回才能教育全国大会委員

- 大会委員長……本多　正明
- 大会副委員長……田中　金重
- 大会企画委員長……広瀬　八朗
- 関東地区支部長会幹事長……藍川　安隆
- 東京事務所長……水野　明夫
- 企画委員

（指導者）

安田　広務　青木　博幸　大熊　庸生
足立佳代子　石川　裕子　印田　礼二
上野日出子　大坂　和彦　小幡　良平
金沢　裕久　小林　庸男　佐藤　勝夫
渋谷　重良　津田　吉男　富川　歓
七海浩一郎　原　まり子　深沢　薗子
牧野　郁子　三樹　正　村上　豊
山本　真嗣　牧野　法子　斉藤　りえ

（支部長）

中川　匠　山本　和人　平岩　恵子
新井　雄市　山内　一郎　羽賀　義恵
大西　裕之　亀井美栄子　上山　光義
城所フサ子

- ピアノ伴奏

秋葉三佐子　野口　映子　三谷　紀子
黒川美方子

- アナウンサー

山内　静子　鶴岡佐代子

- 賛助出演〔箏〕……正派邦楽会

総裁・家元・中島　靖子

- 主催

社団法人　才能教育研究会

- 本部

◆本部
〒390 長野県松本市深志3-10-3
☎0263（32）7171
◆東京事務所
〒110 東京都千代田区神田駿河台2-9
主婦の友文化センタービル２Ｆ
☎03（295）0270
◆東海事務所
〒464 名古屋市千種区春岡通4-15 大沢美良方
☎052（751）3436

1982年全国大会プログラム

第30回卒業式(午後1時より)

祝賀演奏 箏 六段の調べ・松籟譜 合奏……八橋検校・中島雅楽之都
卒業生演奏「ユダス・マクベス」よりの合唱……ヘンデル
挨　拶……大会委員長 本多正明
挨　拶……会長 鈴木鎮一
卒業証書授与……会長 鈴木鎮一
祝　辞……名誉会長 井深大
卒業演奏 ガボット……ゴセック

第28回全国大会(午後2時より)

箏とバイオリン　1.春の海……宮城道雄
ピアノ独奏　●イタリア協奏曲 第3楽章……バッハ
バイオリン　●7才以下の卒業生による
　a.協奏曲 第5番 第1楽章……ザイツ
　b.無窮動と習作……鈴木鎮一
セロ　●aアレグロ……鈴木鎮一
　b.メヌエット……バッハ
　c.狩人の合唱……ウェーバー
　d.ソナタ ホ短調 第1・2楽章……ビバルディ
弦楽合奏　2.アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク 第1楽章……モーツァルト
バイオリン　3.協奏曲 イ短調 第1楽章……バッハ
バイオリン　4.アレグロ……フィオッコ
合奏　●a.浜辺の歌……成田為三
　b.軍隊行進曲……シューベルト
バイオリン　5.二つのバイオリンのための協奏曲 第1楽章……バッハ
フルート　a.アルルの女よりメヌエット……ビゼー
　b.ブーレ……ヘンデル
　c.ベニスの謝肉祭……ジュナン
バイオリン　6.協奏曲 イ短調 第1楽章……ビバルディ
バイオリン　7.ブーレ……バッハ
バイオリン　8.メヌエット……ベートーベン
バイオリン　9.二人のてき弾兵……シューマン
バイオリン　●鈴木先生のお話と宝くじコンサート
全員合唱　●おねがい……鈴木鎮一

皇族の御出席を賜った才能教育全国大会

第１回	昭和30年 （1955年）	皇太子殿下　秩父宮妃殿下 高松宮両殿下　三笠宮殿下 東久宮妃殿下	東京体育館
第３回	昭和32年 （1957年）	秩父宮妃殿下	東京体育館
第11回	昭和40年 （1965年）	皇太子殿下　美智子妃殿下 浩宮様	東京体育館
第12回	昭和41年 （1966年）	秩父宮妃殿下	日本武道館
第13回	昭和42年 （1967年）	常陸宮妃殿下	日本武道館
第15回	昭和44年 （1969年）	浩宮様	日本武道館
第17回	昭和46年 （1971年）	秩父宮妃殿下　三笠宮妃殿下 三笠宮容子内親王	東京体育館
第18回	昭和47年 （1972年）	皇后陛下 皇太子殿下　美智子妃殿下 秩父宮妃殿下	日本武道館
第19回	昭和48年 （1973年）	常陸宮妃殿下	日本武道館
第20回	昭和49年 （1974年）	皇太子殿下　美智子妃殿下 浩宮様　礼宮様　紀宮様	日本武道館
第23回	昭和52年 （1977年）	皇太子殿下　美智子妃殿下 礼宮様	日本武道館
第25回	昭和54年 （1979年）	皇太子殿下　美智子妃殿下	日本武道館
第27回	昭和56年 （1981年）	浩宮様　常陸宮妃殿下	日本武道館
第28回	昭和57年 （1982年）	皇太子殿下　美智子妃殿下	日本武道館

日本及び世界の要人におきかせした子供達の演奏

佐藤元首相(故人)

カーター前アメリカ大統領

鄧小平中国副首相

〔日 本〕

天皇陛下

昭和53年10月15日。松本市運動公園陸上競技場。長野やまびこ国体開会式。
県下500名の生徒が出場しました。

皇太子殿下美智子妃殿下

昭和55年10月2日。東宮御所。
第16回海外派遣生徒10名(バイオリン8名、ピアノ1名、セロ1名)が出発前日御所にお伺いして独奏と合奏を30分間おきかせしました。

佐藤栄作元首相

昭和45年3月12日。首相官邸で30名の生徒が演奏し、その後で首相、鈴木会長、井深理事長が育児国策について約30分間の懇談を行いました。

福田赳夫元首相

〈1回目〉昭和53年10月23日。首相官邸。
中国の鄧小平副首相政府歓迎レセプションの時30名の生徒が演奏しました。
〈2回目〉昭和54年6月26日。アメリカ大使館大使公邸でカーター大統領ご夫妻とともに。
東京サミットの時、カーター大統領に愛嬢のエミーちゃんがバイオリンをさげて同行、東京で鈴木会長のレッスンをうける予定でしたが、この時会長はミュンヘンでスズキ・メソード国際大会を開催中でしたので、代りに石川裕子先生が日本の生徒5名をつれてエミーちゃんのレッスンを行いました。

大平正芳前首相

昭和55年3月28日。日本武道館。第26回才能教育全国大会コンサート出場生徒3500名。
会場到着まで秘書の方は〝うちの首相はクラシックが苦手で〟と心配されましたが、フロアー杯の生徒と万余の聴衆の盛大な拍手に最後まで笑顔が続きました。

〔外 国〕

カーター前アメリカ大統領

昭和53年4月9日。ワシントン市ケネディセンターホール
日本とアメリカから夫々100名計200名のスズキ生徒による日米親善コンサート。
カーター大統領の末娘エミーちゃん(当時9才)はスズキ・メソードの生徒なので当日はご夫妻で出席されました。演奏直後さっとステージに上られ鈴木会長と握手されるというハプニングが起り、シークレット・サービスの方達は肝を冷しました。

鄧小平中国副首相

昭和53年10月23日。首相官邸。
日本初訪問の翌日福田総理主催の歓迎パーティの後別室で30名の生徒が演奏しました。当夜は福田総理、全閣僚、与野党々主のご夫妻百余名が出席、30分のコンサートに熱心に耳を傾けられました。

ウ・タント元国際連合事務総長

昭和45年4月12日。万国博覧会お祭り広場。
当日は国連デーで加盟12ヶ国の代表がこの式典に参列、本会関西地区の800名の生徒が演奏しました。

モナコ王国レーニエ大公とキャロライン王女

昭和54年5月10日。モンテカルロ国立歌劇場。ユネスコ主催の国際児童年記念コンサート。
フランス、アメリカ、ソ連、オーストリア、日本の5ヶ国から14才前後の少年少女が各1名選ばれ、日本からは本会豊橋支部の上田明子(14才)が出場しました。

マルコスメキシコ大統領夫人

昭和54年11月13日。メキシコ市の国立歌劇場。
第15回才能教育海外派遣生徒演奏旅行の最終日。非常に感動されたご夫人は翌日大統領官邸でのコンサートを強く希望されたが、このツアーの日程の都合で果せず残念でした。

マルコスメキシコ大統領夫人

大平元首相(故人)

ウ・タント元国連事務総長

音符は音楽ではない

音符の不完全さと、その為に起る音楽教育の欠陥

会長 鈴木 鎮一

音符の発明はすばらしい発明であった。そしてそれは丁度、文字が発明されたと同じほどの重要な意義をもち、人類が作り得た文化として、正に誇るに足るものの一つであるということが出来るであろう。

然し、それは決して**完全なものではない**。音楽芸術のもつ、そのすばらしいデリカシーや、その自由な息吹き、その芸術的感動等を記録するにはそれはあまりにも貧弱なものであり、あまりにも簡単な記録であって、音楽そのものがそのまま忠実に記録されているものではないのである。

人類が近世に於て発明したレコード其他のもの、即ち、音楽をそのまま録音し再現することの出来る記録機械の発明に比べれば、記録の面に於ては、比較にならない不完全なものであることを否定することは出来ないのである。

私共は音符によって音楽を記録する時代の歴史から、一歩前進して、**音楽そのものを記録する時代の中に生活**している。従って私共は、音楽教育の面に於ても、全く新しい時代に属しているお互であることをはっきりと認識しなければならない筈である。そして好むと好まざるとにかかわらず、音楽教育のあり方に、根本的に大きな変革がもたらされたのである。

私は昔の音楽の大家族のことについて想像するのであるが、その昔**音符が発明される以前**にも音楽は存在し、音楽教育は行われたのである。その時代には、**音楽教育は、恐らく音楽によって音楽教育が行われていた**わけであろう。

そうした時代に於て、音符の発明が改革がなされてゆくであろう。

いつまで私共は、**不完全な音符**を第一義的なものとして**教育する必要があろうか。**

恐らく大昔の人々が求めており乍ら、与へられなかったもの……即ち音符のような不完全なものによって音楽を記録し、次の時代の人々が、その不完全なものから音楽を再現する努力をさせられるのではなく、人々の求めていたもの……即ち**音楽そのものが記録され、音楽が音楽そのものによって教育される夢**……そのことが**今日では可能**となってきたのである。今日は、すでに音楽教育の新天地が拓かれた時代に属している。

恐らく多くの大家達は、

「音符は音楽ではない」

ということを語り合ったことであろう。

音楽の片鱗を、あの不自由な不完全な記号に置きかへる発明……その不完全さを知る人々は、音楽が如何にデリケートであり、自然であり、人間の感情の如く刻々に動いてゆく生きたものであるかを知っているのである。

文化の歴史は音符の発明の上にもその変遷改良の歩みを示し、数学的根底の上に今日の音符がつくられてきたのであったが、いくら改良され発達してきたとしても、やはり

「音符は音楽ではあり得ない」

のである。然し、それは**音楽を固定して記録することの出来る唯一のもの**であり、その**貢献するところのものは実に大きなもの**であったという点については異論をさし挟む余地はないのである。

然し、今迄の音楽教育は、音符に頼るより外に手段がなかった為に「音符は音楽ではない」という警告を発したであろう昔の人々が痛感していた教育上の欠陥の中に知らずして転落していったのだと私は判断するのである。

音符と音楽……それは実に**密接な関係をもつ**ものではあるが、この二つのものは、全く**次元を異にする存在**である。

今日の音楽的教育は、音符教育だと言うことが出来るほど、音符を音にする訓練に始まり、音符から音楽をつくり出す能力の育成が音楽教育となっている。

そして「音符は音楽ではない」ということが、いつの間にか、「音符は音楽である」という観念の中に、音楽教育が行われるようになってきてしまっている。

この錯覚が、音楽教育の上に至るところで大きな欠陥をつくり出しているのである。之も私の想像であるが、恐らく音符がなかった時代の音楽の教師は、その指導に当り「音楽から音楽を」教育した人々ばかりであったわけで、そこには音符がなかった代りに、どの教師にも音楽があったことが想像されるのである。

ところが今日は、音符教育が出来れば音楽の教師になることが出来る為に、**音符があって音楽のない人々が世界中至るところで音楽を教育している**。従って、そうした教育によって、技術だけで、音楽のない音楽家も輩出しており、学校教育に於ては、所によっては音楽のない音楽教育が行われている。

音楽、生命のふれ合う世界

会長　鈴木　鎮一

今は亡き、ピアノの巨匠ブゾーニの、モッアルトに対する礼讃の詩に、次のような美しい一節がのこされています。素晴しい言葉だと思います。
かれは、青年のように若く、老人のように賢い。
けっして古びず、けっして近代化せず、墓に埋められて、なお、つねに生き生きとしている。
かれの、かくも人間的な微笑は、われわれを照らし、浄化する。
いまも、なお……。

ようこそおいで下さいました。御光来を感謝いたします。今日の子供達のすばらしい演奏を、どうぞ心しておきき願います。

音楽は、人類が開発した最も優れた文化の一つであり、もし音楽を知らないとすれば、文化の社会に育つ人間として、大きな損失ではないかと思います。

人類の文化のうちで最も普遍化し、その恩恵に世界中の人々が浴しているのが、言葉と文字であります。この言葉と文字に平行して開発されてきたもう一つの文化、それが音楽であり、こちらの方は生命が直接にふれ合う世界であります。

ところが、「音楽をきいても、どうもよくわかりません」とおっしゃる方があります。この人びとは、音楽を言葉や文字に飜訳して理解しなければ承知できず、「何の意味だかわからない」、と考えておられるようです。

音楽は、文字や言葉のように、知性に訴えてわかる世界ではないことを、全く考えてはおられないようです。

そこで、私は、その方々に「美しいとお感じになりますか」ときくと、

「美しいと感じます」と答えられるのです。

すかさず、私は、「それです。音楽を感じることからスタートします。私も、音楽をきいたあと、わかりますか、とたずねられれば、わかりません。と答えるでしょう。しかし、感じますかときかれれば、よく感じます。作曲者の人間も心も感覚も感動もよく感じます。」と答えます。まず美しいと感じる能力から、やがて次第に、音楽の心の世界を感じる能力へと、成長していくわけです。

この感得能力を育てていく為には、バッハなりベートーベンなりの名曲を、自分が美しいと感じたもの一曲を選び、この一曲を、くり返しくり返し50回、100回ときき続けることです

遠くに見える一色のお花畑も、一歩一歩近づくにつれて、美しい花の姿が現われ、葉の色も眼に映り、もっと近づくと、快い香りも感じることができます。このことと同じように、くりかえし、くりかえし、きくうちに、やがては、作曲者の心、人柄、その音楽に託された心、感動などを、まざまざと感じるようになってくるわけです。

即ち、生命と生命のふれ合いが始じまってくるのです。しかも偉大な、美しい心の人々とのふれ合いが……。

今まで音楽に無関心な親であっても、才能教育の家庭で、幼い子供達がバッハやいろいろな曲のレコードを、毎日くり返しきいておけいこしているうちに、一家中が音楽を感じ知るようになり、その喜びの中に生活している家庭が多いことと思います。

音楽の世界では、バッハやモッアルト、ベートーベンなどの優れた人間の生命とのふれ合いの生活をくりかえすうちに、そうした美しい感性の教育が知らぬ間になされてしまうわけです。音楽の中には、今もなお、バッハもモッアルトも、生きてわれわれに話かけてくれるのです。音にいのち在り姿なく生きて、と私は、このような言葉をよく用います。

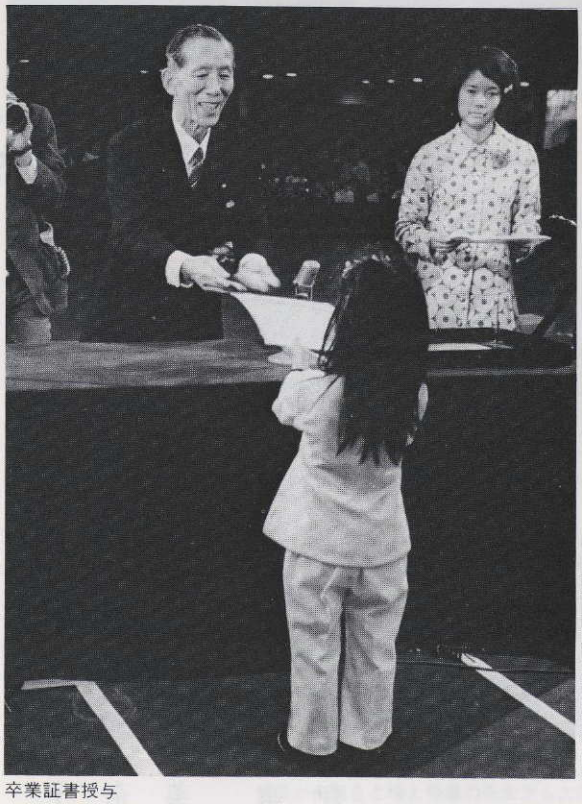
鈴木会長全国大会スナップ

宝くじコンサートにおける鈴木会長のお話のしめくくり。「どの子も育つ　先生次第　先生よろしくおねがいします。どの子も育つ　親次第　お父さま　お母さま　おねがいします……」

キラキラ星変奏曲だけは鈴木会長がニコニコとピアノ伴奏をひかれます。

お一人でご臨席になられた浩宮さまのお見送り

鈴木先生と一緒に3,000名の子どもたちの気持がのんびり、ひったととあっています。



卒業証書授与

カルタとり

上級生のグループレッスン。リラックスと緊張のバランスがとれています。

鈴木会長夏期学校スナップ

レッスンの合間に一茶の俳句カルタ競技

だれが蛙のなき声のような音を出したの？

ステージの上と下での会話、どんなお話？

生徒が何百名と増え指導の先生方も大忙し

●指導者研究大会27年間の記録

年	昭和	開催地	県	期間	会場	出席者
1956	31	松本市外	長野	10月22日～24日	松本市県的会議場、日の湯旅館	43名
1957	32	（才能教育幼年期教育セミナーを7月21日～31日の間松商学園講堂で開催）				
1958	33	松本市外	長野	5月12日～14日	浅間本郷村公会堂	64名
1959	34	松本市外	長野	5月22日～24日	浅間本郷村公会堂	76名
1960	35	松本市外	長野	5月27日～30日	浅間本郷村公会堂	80名
1961	36	松本市	長野	5月6日～9日	信州大学文理学部講堂	不明
1962	37	松本市	長野	5月11日～14日	浅間本郷村公会堂	70名
1963	38	名古屋市	愛知	5月8日～12日	不明	83名
1964	39	松本市	長野	5月25日～28日	浅間本郷村公会堂	86名
1965	40	京都市	京都府	5月10日～14日	京都歯科医師会館	88名
1966	41	福島市	福島	5月16日～21日	花月ハイランドホテル、仙台七十七銀行本店ホール	82名
1967	42	天城高原	静岡	5月9日～16日	天城高原ロッジ	111名
1968	43	天城高原	静岡	5月13日～18日	天城高原ロッジ	114名
1969	44	宇治市	京都府	5月19日～23日	花やしき浮舟園、宇治市民会館	110名
1970	45	妙高高原	新潟	5月18日～22日	妙高高原ホテル	130名
1971	46	飯坂温泉	福島	5月17日～22日	あづま荘、福島県婦人会館	146名
1972	47	蒲郡市外	愛知	5月22日～27日	三河ハイツ	162名
1973	48	宇治市	京都府	5月21日～26日	花やしき浮舟園、宇治市民会館	156名
1974	49	蔵王町	宮城	6月3日～8日	蔵王ハイツ	177名
1975	50	（ハワイ）		（次頁に掲載）		
1976	51	天城高原	静岡	5月16日～21日	天城東急ホテル（旧高原ロッジ）	219名
1977	52	（ハワイ）		（右頁に掲載）		
1978	53	蒲郡市外	愛知	5月21日～26日	三ヶ根グリーンホテル	288名
1979	54	（ミュンヘン）		（次頁に掲載）		
1980	55	蒲郡市外	愛知	5月18日～24日	三ヶ根グリーンホテル	264名
1981	56	琵琶湖畔	滋賀	5月31日～6月5日	ホテルレイクビワ	262名
1982	57	琵琶湖畔	滋賀	5月23日～28日	ホテルレイクビワ	?

〔鈴木会長の研究発表と講義〕表現のユーモアと真剣な内容との一致。高い精神的内容と徹底した実技の指導。鈴木先生の魅力は盡きません。

〔この研究発表と講義の源泉〕毎年十月から三月一杯、毎朝三時から九時まで、鈴木先生はバイオリン、ピアノ、セロ、フルートの子供達の卒業テープを、一本一本、心をこめておききになり、二十五年が過ぎました。テープ数は昨年から一万本をこえてしまいました。気の遠くなる超常識的なお仕事ぶりです。

子供達の演奏に関する詳細かつ厖大な情報が、毎年会長の頭の中で綜合分析されて、その年のいくつかのテーマが掲げられます。当然はちきれそうな内容で、五泊六日の日程でも消化がむつかしいようです。

〔前人未踏の教育実践〕現在、日本における本会の生徒は二万人。指導曲集一巻を終らずにやめたものを除く全員が、夫々の段階における卒業テープの提出によって、鈴木先生の前で、最低でも一回、多い子は六回もの独奏をすることになるのです。したがって先生方の指導ぶりも又、鈴木先生には一目いや一聴瞭然というわけです。

二万人の生徒の学習と、六百人の先生方の指導の、その両方の詳細に通じているという教育者が、今まで世界にいたでしょうか。

〔開催準備〕東北、長野、東海、関西、関東などの各地区指導者会がまわり持ちで会場を探し、諸準備にあたります。

〔昭和三十年代〕ほとんど松本で行われました。当然のことですが、すべてが松本中心の時代でした。

〔昭和四十年代〕内に育った力が多数の若芽を一時にふくらませるように、松本の地から一転して、日本各地の景勝の地が会場にえらばれた時代です。

〔昭和五十年代〕一年毎に海外でもこの研究大会が開催されることになり、スケールが一段と大きくなりました。六十年代には、間違いなく国内大会と海外大会とが毎年平行して行われるようになるでしょう。昭和五十七年の今日、このきざしが濃厚です。

〔会場の思い出〕とくに昭和四十年以後、一つ一つの大会の記憶が鮮明でしかも心地よいことは、出席者のすべてに共通しているようです。

純白雄大な富士の景観を、朝夕ぜいたくに眺め得た伊豆の天城会場。

宇治川にそう花やしき浮舟園は、源氏と平家の両物語にふかく関与し、お隣りには十世紀に建立された平等院鳳凰堂が、朝日夕日に照り輝いていました。

広大なひっそりした空間に、どっしりと横たわる妙高と蔵王の姿は、今日なお心に鮮かです。

三ヶ根グリーンホテルとホテルレイクビワの両会場は、夫々の素晴しい展望とともに、三百名もの出席者が楽々と収まる大きなホールのある点で、私達の研究会場としては極めてすぐれているといえます。

〔研究と懇談と親睦〕五泊六日、景勝の地で日常性をはなれ、皆で研究にうちこみ、終れば懇談を行い、おのずからの親睦をはかってきたのが、この指導者研究大会の今日までの経過です。

●国際スズキメソード研究大会　第1回～第5回

1.　ハワイ(第1回) 1975年 出席者872名

●期　間　昭和50年6月26日出発～7月5日帰国　観光2日間
●会　場　ホノルル市ヒルトンハワイアンビレッジのコーラルボールルーム（1047坪）
●参加国　日本〈571名〉　アメリカ・オーストラリア〈301名〉
●ホノルル到着の喜び　どんよりした羽田を3台のジャンボで出発、朝6時30分にホノルル空港到着、澄み切ってキラキラ輝くような空気、さわやかで何ともやわらかなそよ風、首にかけられた美しいレイ、全員まずハワイ到着の感をふかくしました。

2.　ハワイ(第2回) 1977年 出席者621名

●期　間　昭和52年6月26日出発～7月5日帰国　観光3日間
●会　場　第1回と同じ及びハワイ大学教室とドミトリー
●参加国　日本〈443名〉　アメリカ〈147名〉　オーストラリア〈41名〉
●閉会式における鈴木会長の挨拶

「最後に、日本製の私のひどい発音の英語は、確かに、最も悪い教育の代表的見本でありますことを、今回も全員に確認していただいたわけです。私の英語は残念ながら手おくれです。音楽教育においては、どうかこの私の英語のように育てないようお願いします」と結ばれ、満場大笑いとなりました。

3.　サンフランシスコ 1978年 出席者1,000名～1,100名

●期　間　昭和53年8月6日出発～15日帰国　観光2日間
●会　場　サンフランシスコ州立大学
●参加国　日本〈205名〉　アメリカとカナダ〈約800名〉外5ヶ国
●才能教育国際組織の発足

この大会には日・米・英・独・仏・カナダ・デンマーク・スイス各国の指導者が出席し、何とか世界組織をつくりたいとの声が上り、本多正明理事が草案をつくり検討が始められた。

4.　ミュンヘン 1979年 出席者668名

●期　間　昭和54年6月22日出発～7月6日帰国　観光7日間　―研究大会は6月26日～29日の4日間―
●会　場　ミュンヘン市シェラトンホテル
●参加国　日本〈259名、指導者107名、生徒74名、付添父兄46名〉
アメリカ、カナダ、オーストラリア、ベルギー、イギリス、フランス、ドイツ、スウェーデン、デンマーク、オランダ、インドネシア（12ヶ国）〈409名〉
●International Suzuki Association常任委員の決定

日本…鈴木鎮一、本多正明　アメリカ…ジョン・ケンドール、ウイリアム・スター、マーク・ビヨルク　西ドイツ…マリアンヌ・クリングラー　デンマーク…ベル・デトレコイ　オーストラリア…ハロルド・ブリッセンデン

5.　マサチューセッツ 1981年 出席者1,100名～1.200名

●期　間　昭和56年7月25日出発～8月7日帰国　観光5日間　―研究大会7月27日～31日―
●会　場　マサチューセッツ大学
●参加国　日本〈105名、指導者21名、生徒と父兄84名〉
アメリカ、カナダ、イギリス、ドイツ、フランス、デンマーク、スウェーデン、ブラジル、オーストラリア、オランダ、ベルギー、フィンランド、イスラエル（14ヶ国）
●第6回スズキ大会は1983年日本で行うことに決定

7月29日の各国代表者会議において満場一致で日本開催が決定いたしました。

●才能教育夏期学校(松本)

参加した子供達は、日常会話のように、バッハやモーツァルトやビバルディを、朝も昼も晩も、いきいきと楽しそうに弾き合っている。譜面台は一本もない。これがスズキ夏期学校だ。

アメリカから出席した先生の言葉

回	開催地	西暦	昭和	期間	会場	生徒数
1	蓼ヶ峯	1951	26	8月17日～22日	蓼ヶ峯ホテル	109名
2	〃	1952	27	7月28日～8月3日	〃	82名
3	松本市	1952	27	8月7日～12日	信州大学文理学部	83名
4	〃	1953	28	8月7日～13日	〃	293名
5	〃	1954	29	7月28日～31日	松商学園	458名
6	〃	1955	30	8月5日～8日	〃	307名
7	〃	1956	31	8月2日～5日	〃	167名
8	〃	1957	32	8月7日～10日	本郷小学校	不明
9	〃	1958	33	8月2日～5日	〃	250名
10	〃	1959	34	8月2日～5日	〃	358名
11	〃	1960	35	8月2日～5日	〃	不明
12	〃	1961	36	8月4日～8日	〃	410名
13	〃	1962	37	8月2日～7日	〃	不明
14	〃	1963	38	8月3日～7日	〃	不明
15	〃	1964	39	7月31日～8月5日	〃	444名
16	〃	1965	40	7月30日～8月3日	〃	470名
17	〃	1966	41	8月2日～6日	〃	370名
18	松本市	1967	42	8月3日～8日	本郷小学校	460名
19	〃	1968	43	8月3日～7日	才能教育会館、市民会館、本郷小学校	399名
20	〃	1969	44	7月30日～8月2日	才能教育会館、市民会館、松南高校	約500名
21	〃	1970	45	7月30日～8月5日(A・B・Cグループ別)	〃	約700名
22	〃	1971	46	(前班) 7月30日～8月2日 / (後班) 8月2日～5日	〃	1,100名
23	〃	1972	47	7月28日～31日 / 8月1日～4日	〃	1,277名
24	〃	1973	48	7月28日～31日 / 8月1日～4日	〃	1,390名
25	〃	1974	49	7月28日～31日 / 8月1日～4日	〃	1,227名
26	〃	1975	50	7月29日～8月1日 / 8月2日～5日	〃	1,154名
27	〃	1976	51	7月26日～29日 / 7月30日～8月2日	〃	1,283名
28	〃	1977	52	7月26日～29日 / 7月30日～8月2日	〃	1,280名
29	〃	1978	53	7月28日～31日 / 8月1日～4日	才能教育会館、スズキメソード研究所	1,396名
30	〃	1979	54	7月27日～30日 / 7月31日～8月3日	市民会館、あがたの森文化会館	1,440名
31	〃	1980	55	7月26日～29日 / 7月30日～8月2日	〃	1,504名
32	〃	1981	56	7月30日～8月3日 / 8月4日～7日	〃	1,270名
33	〃	1982	57	7月26日～29日 / 7月30日～8月2日	〃	?

1981年夏期学校の内容

2年前からピアノ科が加わりましたが、今回の紹介はバイオリン科、チェロ科、フルート科の内容です。

◇クラス別教室レッスン(3日間)

午前9時30分～11時20分　会場はあがたの森文化会館(旧制松本高校)才能教育会館、鈴木メソード研究所、松本市民会館控室

●全国各地の教室から出席した指導者の活躍舞台です。バイオリン科はキラキラ星から研究科卒業までの26教室に各4名の指導者が、セロ科は4教室に10名、フルート科は2教室に8名の指導者がレッスンにあたりました。

◇グループレッスン(3日間)

午後1時～2時10分　会場は松本市民会館ホール

●第1日目の例――バッハのaモール1楽章、フィオッコのアレグロ、ドッペル1楽章～むすんでひらいて、キラキラ星変奏曲の12曲(バイオリン指導曲集七巻～一巻)これは何といっても鈴木会長の独壇場です。バッハaモールの40名位から、最後のキラキラ星では500名をこえますが、一日、二日、三日と目に見えて音色が変り、演奏のすみずみに至るまで潑剌としたパワーが加わってきます。夏期学校最大の魅力です。

◇才能教育会館ホールコンサート(3日間)

午後2時30分～4時、主としてチェロやバイオリンの小グループの斉奏コンサートが、よく響く小ホールで行われます。

◇午後のコンサート(3日間)

午後2時30分～4時30分、会場は松本市民会館ホール

●日本各地の教室で熱心に勉強しよく育った子供達のバイオリン、ピアノ、セロ、フルートの独奏が連日続々と行われます。見て楽しく、きいて素晴しい、レッスンの励みになるコンサートです。

◇夜のコンサート(最終日の前夜)

午後6時30分、松本市民会館ホール

●海外派遣生徒クラスの最上級生徒のソロです。拍手又拍手。世界の檜舞台で活躍のできる、まさにザ・スズキ・コンサートです。

◇お別れコンサート(最終日)

9時30分～11時30分、市民会館ホール

●3日間でどれ程変ったか、鈴木会長の最後のグループレッスンでのテストです。子供達は喜々として力一杯弾きますので、音色はキラキラと輝いています。終れば閉校式、正午解散で又来年というわけです。

アメリカにおけるスズキ夏期学校 1981年 55会場 1977年 29会場(下記参照)

スズキ・メソード夏期学校の集中的な一週間で、鉛が金に変るような質的変化が、子供、親、教師など、参加するすべてのものの上に起る。

〔子供の自覚〕夏期学校を終って帰るとき、子供たちは充足した満足感にひたり、音楽の必要なことと、何か自分の存在感というものを知るようになる。

〔親たちの変化〕他の地方から参加した多数の家族と寝食を共にし、言葉づかいや態度を見くらべ、伝ってくる熱心さをつかみとり、スズキ・メソードとは人生のいき方だと感じとるようになる。

〔教師の得るもの〕すべての先生がこの夏期学校で、自分自身を見出すことができるだろう。学ぶ立場、見学者、主催者側、いずれの立場で参加するにしても、ここで分ち与えられるアイディアやエスプリは、きわめて高度なものである。

更にどんなたくみな指導者でも、必ず夏期学校で学ぶものがあるはずである。才能教育の方法は、常に成長を続けているものなのだから。

〔夏期学校の継続と拡がり〕最大の驚きは、この夏期学校を組織する人々の姿である。くる夏もくる夏も、いかに多くの時間と労力が注入されることだろうか！

この続くこと自体が、夏期学校開催の大きな肯定であり、シンイチ・スズキの洞察した人間の最善なるものがこの中にちりばめられている。(ローデ・アイランド大学音楽部教授、イサカ・スズキ研究会指導者ロバート・カリアー)

現在アメリカでは、15万名ものスズキ・チルドレンがバイオリンそしてピアノ、セロ、フルートを習っていますが、このカリアー教授の見事な表現のように、アメリカのスズキ・メソード理解は実に明快で奥行もふかく、その拡がりの巨大なことも納得されます。

●5月5日—7日　ワークショップとコンサート　テネシー州メンフィス州立大学
●6月3日—5日　スズキ・バイオリン・フェスティバル　ウェストバージニア州チャールストン　モリス・ハーベイ大学
●6月4日—8日　ダラス・スズキ夏期学校　テキサス州ダラス大学
●6月5日—8日　スズキ・ピアノ夏期学校　カンサス州　エムポリア州立大学
●6月8日—10日　スズキ・ストリング・ワークショップ　ルイジアナ州ニューオレアンス　テレレイン大学音楽学部
●6月9日—11日、12日—16日　ルイズビル・スズキ夏期学校　ケンタッキー州　ルイスビル音楽大学
●6月9日—14日　中南西部スズキ夏期学校　カンサス州　オタワ大学
●6月12日—15日　アイダホ・スズキ夏期学校　アイダホ州　ノースウェスト・ナザレン大学
●6月13日—17日　インターマウンテン・スズキ夏期学校　ユタ州　ユタ大学
●6月17日—21日　シラカス・スズキ・ピアノ夏期学校　ニューヨーク州　メトロポリタン芸術大学
●6月18日—24日　グレーター・ワシントン・スズキ夏期学校　ワシントンD・C　アメリカ・カトリック大学
●6月19日—23日　パシフィック・ノースウェスト・スズキ夏期学校　オレゴン州　フォレストグロブ　パシフィック大学音楽部
●6月19日—21日　モデスト短期大学スズキ才能教育　カリフォルニア州　モデスト短期大学
●不明　グレイター・シカゴランド・スズキ夏期学校　イリノイ州シカゴ　デポール大学
●6月25日—7月1日　東ネブラスカ才能教育ワークショップ　ネブラスカ州リンカーン　ネブラスカ大学
●6月24日—27日　カリフォルニア州　ラ・ホラ　カリフォルニア大学
●6月26日—30日　マンハッタン・ミドーアトランティック・スズキ夏期学校　ニューヨーク市　マンハッタン音楽学校
●6月26日—28日　スズキバイオリン・ワークショップ　カリフォルニア州　スタンフォード大学
●6月26日—30日　ノーザンアリゾナ・スズキバイオリン夏期学校　アリゾナ州　フラグスタッフ　ノーザンアリゾナ大学
●6月25日—7月1日　全国チェロ夏期学校　カリフォルニア州パサデナ　カリフォルニア工科大学
●6月26日—29日　シャロッテ・スズキ夏期学校　ノースカロライナ州　ハーディング高等学校
●6月26日—30日　デンバー・スズキ夏期学校　コロラド州　デンバー大学
●7月9日—15日　スズキ・キングストン夏期学校　カナダ　クィーンズ大学
●7月9日—12日イサカ・スズキ夏期学校　ニューヨーク州　イサカ大学音楽学部
●6月10日—14日　ノーザンアイオワ・スズキワークショップ　アイオワ州　ノーザンアイオワ大学
●7月10日—14日　スズキ・ワークショップ　ニューヨーク州　ショトウクワ学院
●6月8日—　クレアモント・スズキ夏期学校　カリフォルニア州　クレアモント大学院
●6月23日—　スティーブンスポイント・スズキ夏期学校　ウィスコンシン州　ウィスコンシン大学
●8月6日—15日　サンフランシスコ・スズキ国際夏期学校　サンフランシスコ州立大学

●才能教育研究会本部の行う定例行事について　●指導者研究大会(5月～7月)　●夏期学校(7月～8月)　●海外派遣生徒演奏旅行(10月～11月)　●卒業テープの提出(10月～3月)　●全国大会と卒業式〈バイオリン・セロ・フルート科〉(3月)　●ピアノ科卒業式〈長野・信越・北陸地区、関東地区、東海地区、関西地区の四地区〉(3月)　●ピアノ研究グループ講師認定式(8月)　●海外における鈴木メソード・ワークショップのための指導者派遣(随時)

Graduation System

The Graduation is one of the most important events along with the National Concert in spring, the graduation ceremonies for piano students in Matsumoto, Tokyo, Osaka and Nagoya, the early-summer meeting of leaders, The International Suzuki Teachers Conference, the summer school in Matsumoto and the overseas concert tour in autumn. When the autumn deepens and you have cloudless blue skies above its the season of recording graduation tapes. An important and great task awaits the leaders. This takes place in all classes across the country, from Sapporo to Kumamoto.

(Recording of graduation tapes)

Regardless of their age, all students, who are taking lessons of violin, piano, cello or the frute on the Suzuki Text Book and have finished graduation pieces, are required to send in recorded tapes of those pieces for Dr. Suzuki's comment.

(Purpose of submitting graduation tapes)

The purpose is solely to "motivate students." Therefor, the sent in tapes are not given marks, nor ranked or rated as good and bad as in normal tests. It is not for finding faults with students. It is to motivate students and at the same time to motivate their parents and teachers.

(Dr. Suzuki listening to graduation tapes)

Dr. Suzuki makes it a rule to listen to these tapes from 3 to 9 o'clock every morning and he has continued this difficult task for more than 20 years with a smile. The tapes are returned with his advice being recorded. The number of tapes exceed 8,000 per year and this year (1981). It is said to have reached 9,000. We cannot but be struck with his sincerity when we think of Dr. Suzuki listening to these tapes one by one.

(Recording scenes)

There is really a magic in the word that one's tape is listened by Dr. Suzuki. The child triyng to concentrate on the performance, the mother crossing her fingers and the teacher becoming tense in spite of himself, it's a moment of concentration, like the hardening of steel.

This recording is demanding second to none except a recital in terms of practice and tension required.

This valuable chance is given to every student once a year.

(All Tape Data Memorized by Dr. Suzuki.)

Recorded play of each of 20,000 Suzuki children in Japan is carefully listened to by Dr. Suzuki and is stored in his vast memory, be it either violin, piano, cello or flute.

The huge data on students' performance are assorted annually and made available for discussion at study meetings in Japan and abroad. The concert that "every child can be made to grow with the proper method of education" is thus pursued by him in practice.

(Magic in National Concert)

The National Concert is a super-jumbo concert performed by about 3,000 children. The number of participants makes a rehearsal impossible. Still, they play in concert magnificently. This fact shows how the graduation system succeeded in "motivating" children.

The relation between quality and quantity of graduates

(Graduation pieces)

Violin	First Step	Second Step	Third Step	Fourth Step	Fifth Step	Sixth Step	Seventh Step
Composer	Gossec	Bach	Vivaldi	Corelli	Bach	Mozart	
Piece	Gavotte	Bourree	Concerto in G Minor 1st mvt,	La Folia	Concerto No. 1	Concerto No. 4	Mozart Rondo 5' 37" and Paradis Sicilienne 3' 15"
Suzuki Text Book	Vol. 1	Vol. 3	Vol. 5	Vol. 6	Vol. 7	Vol. 10	
Time	2' 23"	3' 46"	4' 31"	7' 22"	15' 18"	22' 50"	

Piano	First Step	Second Step	Third Step	Fourth Step	Fifth Step	Sixth Step	Seventh Step
Composer	Bach	Bach	Mozart	Bach	Mozart	Bach	Beethoven
Piece	Minuet No.2	Minuet I, II and Gigue from Partita	Sonata K.V. 331	Concerto Italien	Concerto "Coronation"	Partita in Bb	Sonata "Appassionato"
Suzuki Text Book	Vol. 2	Vol. 4	Vol. 7				
Time	1' 50"	5' 36"	17' 05"	12' 20"	31' 19"	17' 05"	31' 28"

THE PRINCIPLE OF SUZUKI'S MOTHER TONGUE METHOD

We have to return to this principle again and again, and try to realize Dr. Suzuki's philosophy ever more deeply.

This article is based on Dr. Suzuki's writings in the monthly publication of Talent Education, issued in April and May, 1957. His teaching seems to have a an ever new meaning.

'Every child is sure to grow' is the the belief of parents.

Because of this belief, parents can with confidence and infinite affectinn help their children learn their mother tongue and develop their ability without worrying or fretting about it. This is not an acquired knowledge, but a wisdom inherent in the human being.

Education beings on the very day a child is born.

'At an earlier date' is one of the principles of talent education, and it is certainly observed in the process of mother tongue learning.

One knows well that rice will never give a good crop if one fails to breed a good young plant, but it is a pity that there are many who do not pay enough attention to bringing up their own dear children, while they are still young.

Parents, who are teacher of a mother tongue to their children, are all experts in that language.

The better teacher brings out better ability from his pupils. If the teacher's ability is low, that of his pupils may not be expected to grow up fully. It is an undeniable fact.

'Intuition' is important in talent education.

Learning of a mother tongue is conducted in close conection with 'intuition', the highest faculty inherent in the human being.

If the first word of a mother tongue be given to a child, not together with his mothers loving smile but with hard written letters, will the child be able to learn to speak his own language?

Never force children to practice or rehearse.

There may be nobody in the world who has been forced to learn his mother tongue, ordered by someone to 'study hard'.

No parents (teachers) ever get angry with or scold the children (pupils) because they are not able to speak their mother tongue fluently.

Therefore, children can easily and without hindrance develop their own ability of language, having no inferiority complex at all. Is it not an ideal state of education?

Children develop their own ability for themselves.

When children learn to speak, they enjoy speaking and practice it everyday among themselves. Elder children often join younger ones and make them conscious of the necessity of learning more and help them get more. In this way the children develop their own ability of language for themselves. This is a wonderful way of learning. The spirit of self-betterment and collaboration prevails among them.

Repeat practice and rehearsal everyday, and the basis is prepared for a great leap forward in talent.

Learning of a mother tongue is made exactly in this way. It is why every child can learn and become an expert in his mother tongue.

Human faculty develops by exercise, only by exercise, regardless of its inborn differences.

Why is it necessary to practice everyday?

Life force has the power of healing any wound inflicted on a human body. Human memory is also being obliterated everyday by the similar process.

The necessity of repeated practice is what the learning of a mother tongue tells us.

Every child shows a great leap forward before long.

An infant, who has learned to utter a word or two when one year old, rapidly develops his ability and, when he is three or four years old, becomes able to command the language freely. This is a wonderful progress in so short a time.

Education, which does not bring about such a leap forward, is a failure.

'Likes or dislikes' is out of the question.

If you ask a Japanese whether he likes English or not, you will get an answer easily. But if you ask him whether he likes Japanese, he will find himself at a loss for an answer. In this case whether one likes it or not is out of the question.

Education, if it is a good one, makes you develop your own faculty to a high degree, while you are unconscious of it.

Disregard the difference in inborn abilities.

Of all the cultural faculties a human being is born with, that of learning his mother tongue may be the only one that we can disregard the difference in. Anybody can learn his mother tongue, but it is evident that someone must teach and help him learn it.

Teaching-matter needs to be mastered thoroughly, and felt by the children not too difficult.

This is the most important point to prevent the pupils from dropping out. At first we teach them an easy, introductory part carefully and bring them to play it anyway, and then make them practice it again and again. And not until they have learned it thoroughly, been able to perform it beautifully, and begin to feel it easy, do we move to the next step.

No textbook is necessary for teaching of a mother tongue.

A mother always speak to her baby, with a loving smile on her face. She has been doing so since the very day it was born. Has anybody ever seen a mother teaching her baby to speak their own language with a textbook in hand?

There is no need for any test, entrance exam, terms or school-years.

Nothing involved with the school system is necessary for children to grow up lively and vigorously.

The present school system always drives children by tests and exams. As a result they develop not a test for study but an inferiority complex. A few succeed but many drop out.

For those who think that learning of a mother tongue is one, and that of other subjects is another.

If you think so, you would also have to think of the scene as imaginary -- the wonderful scene before you in which 3,000 children are brilliantly playing the violin in concert.